

『倫理学とはなにか』——その歴史と可能性——

訓 覇 曄 雄
有 福 孝 岳 編

本書は、現代における実践哲学の動向に深い関心を寄せる著者達によって企図された共同研究の成果である。本書の狙いは、倫理学に対する従来の一般的な考え方の枠組を越えて、倫理学の課題をより包括的に理解し、その可能性を追求せんとする思惟動機に見られる。つまり、一般に倫理学は、行為の道徳的乃至価値的性格に関する哲学的な研究であると理解されている。そしてこの時倫理学は、認識論や存在論、或は科学哲学や芸術哲学等と並んで、特に倫理、道徳について論究する哲学の一部門であると考えられている。しかし、倫理学の課題をこのように限定する時、倫理学は、哲学的課題の何分の一かを荷うにすぎないものとなる。

これに反して、本書はへよく知るという哲学的課題とへよく生きるという倫理的課題は本来不可分であるという認識から、兩者を分離して個別的に論究することで事足りりとする一般的理解に對して、根本的な反省を求めている。そしてこのような反省に基づいて考えられる時、倫理学は、人間の多次元的な現実を汲み出し、へ人間そのものを根底から問う哲学的な探究として理解される。

しかし倫理学の課題をこのように理解するとき、同時にそこに、真に倫理的に問うことの難しさが浮び上がってくる。即ち、(1)倫理的問いは、個別科学とは対照的に、人間の現実の全体を問わねばならないということ。そして(2)この全体を問うということは、問われている事柄のうちに、問う主体そのものも含まれているということである。それ故に倫理学においては、学としての客観性

乃至普遍性が果して可能であるか否か、問う主体のあり方が常に反省されていなければならない。更に(3)倫理的問いの対象には、問う主体をまっけて初めて成立するということがあるから、倫理的对象は、与えられているのではなく、課せられているものである。

ところで、今日倫理学がもしその有効性を喪失しているとするれば、それは倫理学が右に述べたような根本的な困難を充分に克服していかないが故であろう。そうだとすると、われわれは、先ずその原因、理由が何処にあるのか、それを思想の歴史のなかに探ってみる必要がある。そして更に一歩進めて、倫理学が真に倫理的に問う力を再び取り戻すことが可能となるために、さきに挙げた倫理的問いの本質に孕まれた諸困難を、積極的に克服することを目指す倫理的探究が要求される。本書は、倫理学のこのような今日の課題に意欲的に取り組まんとする人間探究の書物である。

研究のこうした狙いから、本書の内容構成は「I 倫理思想の歴史」―「II 倫理学の問題圏」との二部編成になっている。つまり、前者においては、古代から現代に至る人間探究の歴史をふり返り、様々の思想類型をみる中で、さきに倫理的問いの本質として挙示した諸論点が、どのように生かされ、どのように蔑にされて来たかが概観されている。後者では、前者によって得られた知見が現代のへ実践哲学の復権運動の主要な動機と連動していることを念頭に置いて、求められるべき倫理学の主題(価値と規範、善、自由、意志、感情、良心、自己、歴史、政治と国家、神)が設定され、人間の現実の種々相が、方法的検討をも含めて分析されている。このような本書は、今日様々の人間の問題を抱えるわれわれに多くの示唆を与えてくれるであろう。是非御一読されたい。

(A5版・二六〇頁・一九八一年三月・勁草書房・一九〇〇円)

(築山修道)